

理 論 編

学習評価の基本的な考え方

..... P 1 ~ P 1 6

学習評価の基本的な考え方

Q 学習評価は何のために行うのですか？

高等学校では平成15年度から学年進行で現行の学習指導要領により、「ゆとり」のなかで「生きる力」を育むことを目指して新しい学校教育が始まっています。これに先立ち、教育課程審議会は「児童生徒の学習と教育課程の実施状況の評価の在り方について（答申）」（平成12年12月）（以下答申という）によって、これからの学力観・評価観の改善事項について提言しました。

答申では、

「学習の評価を行うことは公の教育機関である学校の基本的な責務である。」とした上で、評価の機能と役割について次のように述べています。

学校や教師にとっての評価は…

各学年、各学校段階等の教育目標を実現するための教育実践に役立てるもの。

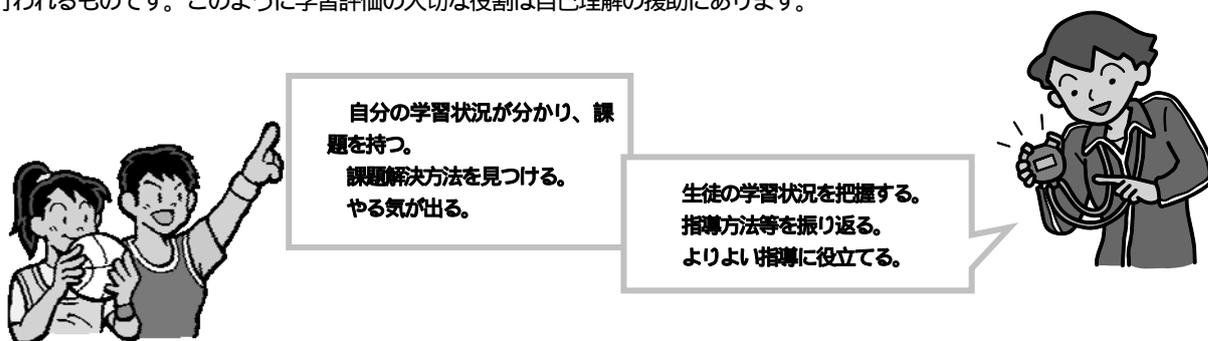
学校・教師にとっての評価は、学校・学年・単元等で立てた教育目標を実現するために、生徒がその目標に照らしてどのように変容しているかを明らかにするために行うものです。

評価とは生徒が何をどのように身に付けているのか、また、どのような点でつまずき、困難を感じているかを知り、それを解決・改善するために教師はどのように指導や支援をしていけばよいのかを明らかにするものであるという考え方が必要です。

生徒にとっての評価は…

生徒の一人ひとりのよさや可能性を積極的に評価し、豊かな自己実現に役立つようにするもの。

生徒にとっての評価とは、自分は何ができ、何が不十分なのか、次にどのような学習をすれば現在抱えている課題が解決できるのかなどが理解できるとともに、今行っている学習を振り返り、次に行う学習に意欲を持って取り組めるようにするために行われるものです。このように学習評価の大切な役割は自己理解の援助にあります。



したがって、学習の評価とは、**「児童生徒のための評価であると同時に、学校や教員が進める教育自体の評価である。」**（答申）といえます。

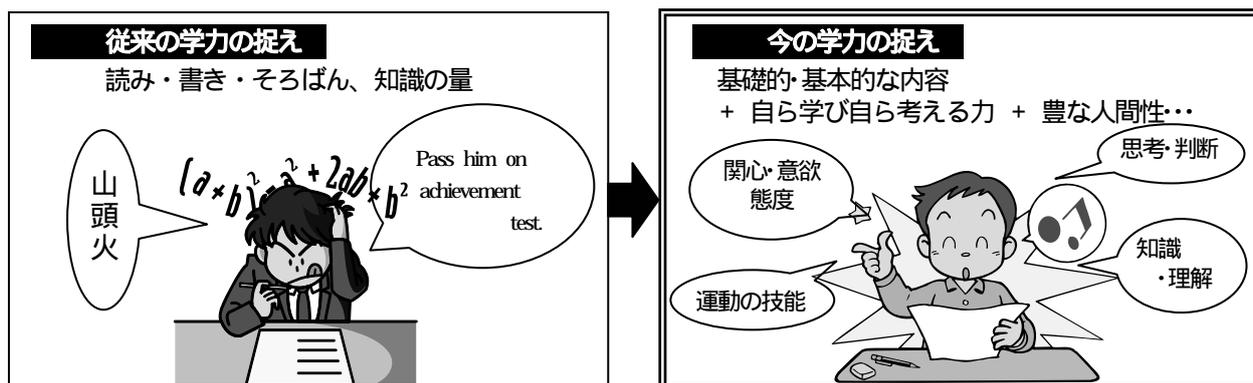
Q 何を評価するのですか？

何を評価するのか？は生徒にどんな学力を身に付けさせたいかと同義であると考えます。

したがって、何を評価するのかを明らかにするには、学力の内容を明らかにする必要があると考えます。

答申では学力について、次のように定義付けています。

単なる知識の量のみでとらえるのではなく、学習指導要領に示す**基礎的・基本的な内容**を確実に身に付けることはもとより、それにとどまることなく、自ら学び自ら考える力などの**「生きる力」**がはぐくまれているかどうかによってとらえる必要がある。



基礎的・基本的な内容とは...

学習指導要領に示されている目標・内容として定められているもの全体を指します。

「生きる力」とは...

21世紀に求められる力（平成8年7月中央教育審議会 答申より）

獲得した知識を保持しているだけでなく、絶えずリフレッシュする力

時々の状況に応じて、考えたり、判断したりする力

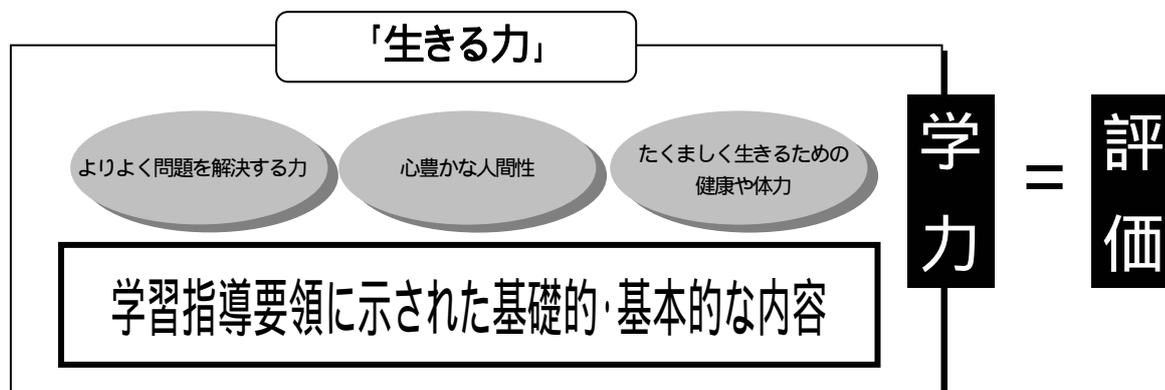
入手した知識や情報を使って新しいものを生み出す創造性

「生きる力」

自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力

自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心

たくましく生きるための健康や体力



Q 観点別学習状況の評価とは何ですか？

観点別学習状況の評価（以下観点別評価）とは、1つの教科の成績を1つの数値等で評価する総合判定に対して、1つの教科について複数の観点を設け、観点ごとに評価する方法です。

高等学校の科目「体育」では、「**関心・意欲・態度**」「**思考・判断**」「**運動の技能**」「**知識・理解**」の4つの観点が、科目「保健」では、「**関心・意欲・態度**」「**思考・判断**」「**知識・理解**」の3つの観点が示されています。

もちろんこれらの観点は独立したものではなく、相互に関連しあっているもので、総合的に捉えることも大切です。生徒一人ひとりの学習状況を観点別に捉えることによって、教師も生徒も学力を多面的に捉え、何ができて何が不十分なのかを明らかにし、次の指導や学習に生かしていく必要があります。

「関心・意欲・態度」

生徒たちの関心・意欲・態度は、自分が教師や友達から誉められたり、認められたりすることで高まりが見られます。逆に、叱責されたり、期待にそぐわなかったりすると、やる気を失ったり、投げやりになったりもします。さらに、その他の日々の子ども達をとりまく状況によっても変動があります。したがって、この観点は単元全体を対象とし、ある特定の時間のみの評価を代表値としてその単元の評価とすることは避ける必要があります。²⁾

関心・意欲・態度の観点の特徴

一般的に変化しやすいので、日々の観察の積み重ねが必要です。

この観点は直接見取ることができない観点であり、より客観的に評価するためには生徒の行動、言動、文字記述等により、総合的に判断する必要があります。

具体的な内容

興味・関心・学習意欲・学習への取り組み姿勢・態度（協調性、公正、責任感、積極性、安全など）

評価規準の表記例（～しようとする）…体育（～しようとしている）…保健

- | | | |
|-----------------|------------------|----|
| ～楽しさを味わおうとする | ～協力しようとする | |
| ～健康・安全に注意しようとする | ～課題について調べようとしている | |
| ～発言・発表しようとしている | ～記録しようとしている | など |



「思考・判断」

思考力・判断力は、生徒が課題解決的な学習を行う学習過程の中で培われていくものであると考えます。そのためには「どうしてだろう」「なぜだろう」「どうやればいんだろう」等の疑問を持てるような学習過程や教材の提示の仕方、発問の仕方を工夫することが必要です。

また、教師と生徒、生徒同士が互いに考えを発表し合う場を意図的・計画的に計画し、学習に組み込んでいくことが重要です。そして、「何についてどのように考えさせるか」「どの程度の考えをまとめさせるのか」等のねらいを明確にして指導し、それに応じた評価規準を設定することが必要です。³⁾

思考・判断の観点の特徴

課題解決的な学習を行う中で培われていきます。習慣化すると定着し、比較的安定した能力となります。

具体的な内容

学習状況の把握、課題の発見と設定、課題解決への計画性・方法の工夫、学び方の習得と実践、自己評価や相互評価での判断力 など。

評価規準の表記例（～している）

- | | | | |
|---------|---------|---------|----|
| ～見付けている | ～選んでいる | ～まとめている | |
| ～比べている | ～整理している | | など |



「運動の技能」

従来、この観点の指導や評価は、「指導者が与えるもの」といった要素が強かったように思います。これからは、教員の指導の下、生徒自身が自分のものとして習得し、経験した中から身に付けた「技能」、課題解決的な学び方やものの考え方から体得した「技能」が求められます。

技能ではとかく「サッカーのリフティング 20 回」といった“量”を評価しがちですが、サッカーのリフティングが 20 回できるための技能、すなわち「膝を柔らかく使って動き、ボール下の中心を蹴る」などという動きの“質”を見取ることが大切です。学習としても 20 回という回数だけでは、「どうすればできるようになるのか」ということを教えることになりません。20 回できるようになるために教える内容が学習の内容となります。よって、この観点の評価は、主として動きの“質”を「観察」によって見取ることになります。

また、「技能」の観点から見える能力は、学習を積み重ねることによって次第に習得されていくものです。よって、指導方法と一体化して、継続的に評価していくことが大切です。

前述したように評価規準に照らして行うこととなりますが、評価する教師の推測や感情に左右されないことが肝要です。生徒一人ひとりの学習状況の事実に着目して、補助簿等に記録をとることによって、習熟度を捉えていくことが大切です。⁴⁾

技能の観点の特徴

- 一度習得すると安定した能力として定着します。この高まりは、「模倣（まねをする）」、「操作（考えて動く）」、「自動化（考えなくても動ける）」という段階が考えられますが、体育授業のなかでは「操作」の段階までは目標としたいところです。

具体的な内容

- 個人的技能、集団的技能、体力を高めることができる動作 など。

評価規準の表記例（～できる）

- | | |
|---------|---------|
| ～動きができる | ～動作ができる |
| ～運動ができる | など |



「知識・理解」

これまでは、ペーパーテストを中心に「知識の量」を評価することが一般的でした。しかし、知識を大量に身に付けても「生きて働く知識」にはなりにくいと考えます。

答申では、「『知識・理解』については、単に覚えこむものと捉えるのではなく、児童生徒が自ら体験して実感を持って学ぶことにより、学習や生活に生きて働くものと捉える必要がある。」と解説しています。

従来からのペーパーテスト中心の評価観から脱却し、口頭試問を行ったり、覚えた知識を使って表現させたり、討論をさせたりするなど、知識を生きて働く形にして表現する学習活動を多く取り入れ、様々な角度から評価できるようにすることが大切であると考えます。

知識・理解の観点の特徴

- 生徒が自ら体験して実感を持って学ぶことにより、学習や生活に生きて働きます。

具体的な内容

- 運動の特性の理解、運動技能の知識や理解、健康の保持増進の知識、安全に関する知識、運動のルール、ゲームの進め方

評価規準の表記例（～している）

- | | | |
|------------|----------|----|
| ～言っている | ～書き出している | |
| ～具体例を挙げている | ～説明している | など |



Q 目標に準拠した評価とは何ですか？

目標に準拠した評価とは、学習指導要領に示す目標に照らして生徒の学習の実現状況を見る評価のことです。

生徒一人ひとりの学習展開に応じて、あらかじめ教育目標を分析して設定した評価規準に照らして、その目標がどの程度実現されたかを評価するものです。

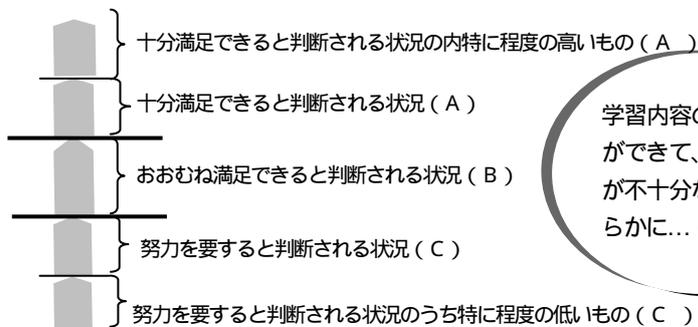
評価規準を事前に設定し、日常の授業の中で直ちにフィードバックして指導や支援に役立てることが重要です。目標に準拠した評価は生徒の学習の実現状況を他者と比較するものではありません。

小学校や中学校では今回の学習指導要領から、指導要録の評定・観点別評価とも集団に準拠した評価から、この目標に準拠した評価に改められました。その理由を答申では次のように説明しています。

自ら学び、自ら考え、よりよく問題を解決する資質や能力などの評価を重視する必要から、児童生徒一人ひとりの進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことができる。学習指導要領に示す内容を確実に習得したかどうかの評価を一層徹底する必要がある。上級の学校段階の教育との円滑な接続に資する。児童生徒の学習の習熟の程度に応じた指導などの、個に応じた指導を一層重視する。少子化等により、学年・学級の児童生徒数が減少してきており、評価の客観性や信頼性を確保する。

図1 目標に準拠した評価⁵⁾

教科の目標や内容に照らして、その実現状況がどの程度の習熟度や達成度かを評価する。(5段階として設定した場合)



指導の効果の把握及び生徒の努力や進歩の状況の確認がしやすい。

具体的な到達規準の設定が必要であり、その判定尺度が明確にされていなければならず、到達の規準をどこにおくか、共通認識を持てるかが問題。

評価規準の作成

「十分満足できると判断される」状況(A)、「おおむね満足できると判断される」状況(B)、「努力を要すると判断される」状況(C)及び(A)の中でも特に程度の高いもの(A) (C)の中でも特に程度の低いもの(C)をどの程度の実現状況とするのが明らかにしておく必要があります。(5段階の場合AとCを設定)

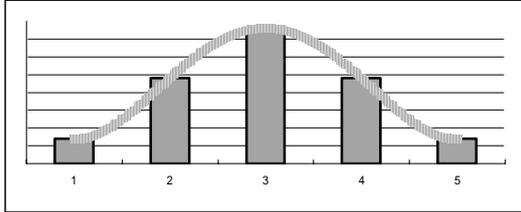
ペーパーテストなどでは %以上の正答率等で数値化できますが、数値化できないものについては工夫が必要です。例えば、観察による評価であれば、授業中の生徒個々の学習活動についてメモしたりして学習の深まりや高まりなどの質的なデータを蓄積し、単元の総括時に定量化する方法が考えられます。

いずれにしろ、保健体育科・学校全体で、誰にも分かりやすく具体的、目に見える形で、どの生徒にも公平に評価できる規準を示す努力をする必要があります。



図2 集団に準拠した評価（相対評価）⁵⁾

学年や学級などの集団の中で、相対的な位置付けがどの程度かという学習状況を評価する。



集団の中で、個人の位置が明確にされる。

学習の進歩や努力の状況がとらえにくい、少子化にともなう母集団の減少により、客観性・信頼性が確保しにくくなった。

一方、集団に準拠した評価（相対評価）は、ある時点での習熟度や達成度を個人間で比較したり、集団の中での位置付けを見たりする評価です。この集団に準拠した評価（相対評価）が生徒にとって全く不必要であるとはいえません。集団内での自分の相対的な位置付けを知ることは、自分の適性を知る手がかりになりますし、これにより自分の目標を定めて学習に取り組む動機付けにもなります。将来の進路を考える際の情報として活用することも考えられます。集団に準拠した評価も必要に応じて行うことが必要です。

これに対して、個人内評価とは、生徒一人ひとりの状態を他者と比較することではなく、個人のよさや可能性を評価することです。個人内の差異に注目した横断的解釈と個人内の時系列的变化に着目した縦断的解釈があります。

例えば、「水泳より陸上のほうが得意である」とか、「去年の50m走の記録より今年は0.5秒も速くなった」などです。

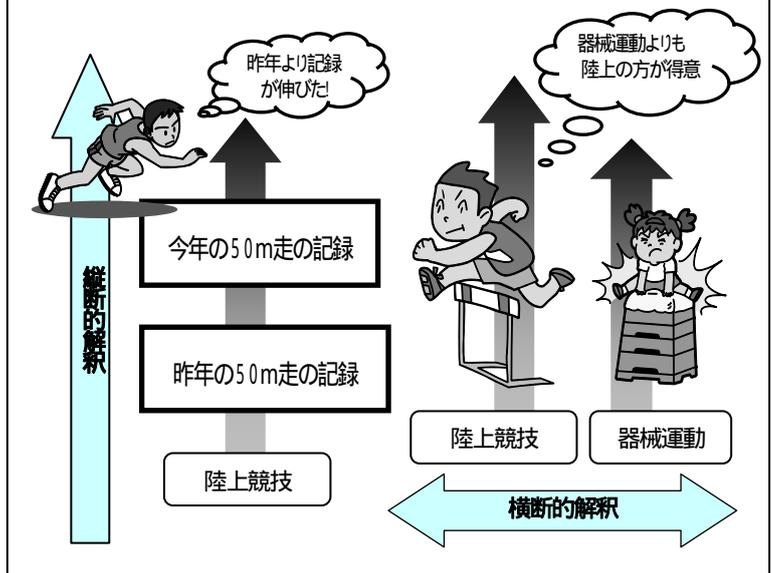
答申においては、「自ら学ぶ意欲や問題解決能力、個性の伸長などに資するよう、個人内評価(児童生徒のよい点や可能性、進歩の状況などを評価)を工夫することも大切である。」としています。

個人内評価は、生徒一人ひとりを多面的な視点で捉えることが必要であるため、教師自身も多様な見方を持つことが必要です。そのためには、生徒の学習プロセスにおける学習活動、製作物、考えたこと、自己評価、相互評価、作文等をファイルし、学習中はもとより、単元や学期、学年終了時に全体を振り返り、生徒の学びを捉え、進歩や可能性を見取る評価の工夫が大切です。

現行学習指導要領の下では、「目標に準拠した評価」がより一層重視され、「個人内評価」の工夫が求められています。

「集団に準拠した評価」と併せたこの3つの評価の特色を生かして、生徒のよさや可能性を伸ばす評価のあり方を教師一人ひとりが考え、学校として共通理解を図った上で、教育活動を行っていくことが重要です。

図3 個人内評価



生徒一人ひとりの学習状況を他者と比較することなく評価する。

生徒のよい点や可能性、進歩の状況などを積極的に評価する。

評定にはそぐわない。

学習評価はいつ行うのですか？

学習評価は、学習前・学習はじめの段階での評価（診断的評価）と学習中の評価（形成的評価）によって進められます。学習前の評価によって、これから始めようとする学習に関する能力や感想・経験等を生徒・教師ともに理解し、連続的な学習中の評価によって生徒の変容等を確認し、必要に応じて学習指導の方向性を修正します。

つまり、どんな課題を持って学習したらよいかを学習前・学習はじめの段階での評価によって知り、その学習が予想（期待）通りにうまくいっているかどうかを判断するために学習中の評価を行います。¹⁾

また、学習後（単元の終わりや学期末等）に学習指導の一部あるいは全過程について、当初の目標に照らして、どの程度学習成果が得られたかどうかを把握するために評価（総括的評価）を行います。

これらの学習評価で得られた資料が学習の成果として成績に表したり（通知表）指導要録に記載する評定にできる限り生かしたりする配慮が必要です。

学習前・学習はじめの段階での評価（診断的評価）

授業の開始時に生徒がこれから学習する領域・種目に関して、どの程度の学力（観点別に）があるかを把握したり、授業の展開にあたって生徒の学習上の難点を発見したりすることを目的に実施する評価のことをいう。

（教師）

単元目標等を設定するために、生徒が学習するのに必要な能力や技能をどの程度身に付けているか知るために診断する。

単元に対する準備状況を把握し、目標を具体化し、実態に応じた指導過程を設定するために診断する。

（生徒）

自分が現在持ち合わせている能力や技能を理解し、学習の出発点を確認する。
これから学習する単元等の見通しを立てるための情報を得る。

学習中の評価（形成的評価）

授業の過程で生徒の学習内容の実現状況（観点別に何ができて、何ができていないか）を明らかにして、ねらいが達成できる授業を実施するために行う評価をいう。

（教師）

生徒が単元の、どこまで達成しているか、どこに困難を感じているのか等を明らかにする。

実現されていない技能や内容は何なのかを明らかにする。（何をどのようにすればよいのか情報を得る）

（生徒）

自分の学習の仕方が予想（期待）通りうまくいっているか、修正・改善を加える。

学習の終わり・学習後の評価（総括的評価）

学習の終了時（単元・学期・学年）に学習のねらいに照らして、指導の経過や結果のまとめを行うものである。つまり生徒の学習の達成度を確認し、その結果が満足できない場合は、その問題点が生じた理由を追求して、指導法の工夫・改善を行い、次の学習に役立てるための評価をいう。

（教師）

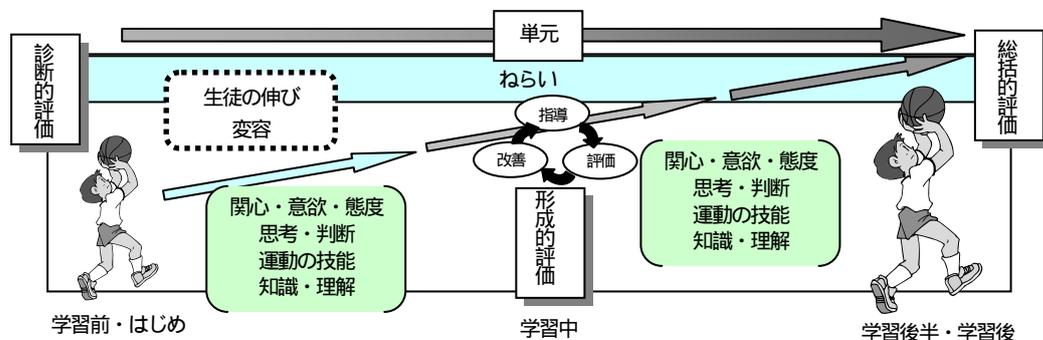
生徒が単元目標等をどの程度達成したかを確認し、次の指導に役立てる。また、達成度が十分でない場合は、補充指導を行う。

指導計画及び学年や単元目標等によって、望ましい結果が得られたかどうかを確認し、目標・計画・方法の改善に役立てる。

次の単元等の準備状況の確認に役立てる。

（生徒）

生徒自身が単元等の全体を振り返り、その目標に照らしての学習の実現状況を把握し、その後の学習に役立てる。



チェック！

形成的評価や総括的評価は生徒をランク付けするためのものではなく、「教師の指導及び生徒の学習の過程の改善、修正」、また、「生徒の学習への動機付けや学びの実態の把握」のために用いられるものです。

Q どんな方法で評価するのですか？

「生きる力」の育成を目指す、現行学習指導要領の下では、児童生徒の学習状況を、単一の時期や方法によって評価するのではなく、児童生徒の成長の状況を総合的に評価することが大切です。

生徒の学習状況を単元の終了時に限らず、単元の途中や1時間の授業中に多面的に見取ることが一層求められています。



この時間のねらいは
だから、××の観
点を評価しよう！
みんなねらいを理解し
ているかな！？

評価の方法としては、ペーパーテストやスキルテスト以外に観察・面接・質問・レポート・学習ノート・発言などがありますが、それぞれの特徴を考慮し、どんな方法で評価することが生徒の成長や教師の授業の振り返りに役立つかを理解する必要があります。（表1、表2を参照）



こんな発言があつたら、課題がもてたことになるかな？！

例えば、教師の観察は生徒の学習活動を評価するという最も基本的な方法ですが、先入観に影響されないことが必要です。特に「思考・判断」や「関心・意欲・態度」などの見えにくい部分を評価していくためには、生徒が外に表していない部分を読み取っていかなくてはなりません。

そのためには、観察する観点を明確にし、具体的な目標とその際に予想される行動を予め明確にしておく必要があります。

また、学習ノートや感想文などの記述内容も生徒の思考過程を知るために有効な評価方法です。どのような記述から生徒の学習状況が読み取れるか、学習過程のどの時期に評価を行えばよいか等を工夫する必要があります。

（学習評価計画作成の手順編参照）

チェック！

「ポートフォリオ・アセスメント」

ポートフォリオは、もともと芸術家が自分の業績を示すために、長期間にわたり本人が自分の代表作品を紙バサミなどに集録したものです。

教育の分野では、生徒の学習における達成を証明するために生徒の成果を集めたものを指します。

ポートフォリオ・アセスメントとは、このポートフォリオを用いて生徒の進歩の状況を評価することであり、生徒自身も責任ある一員として自分の学習を評価する役割を果たします。

集録には目的に応じて、日誌・学習ノート・ゲーム記録カード・感想文・テスト等々、日常の学習にかかわるものを全て含めます。それらから生徒自身に各段階における成果を検討させ、学習の過程や総括時において、目標の実現状況を振り返らせる必要があります。

辰野千尋著：「学習評価基本ハンドブック」図書文化、2002、2

表1 評価方法の種類と使い方

評価法	使い方
観察法	生徒の観察記録を資料として評価する。毎日あるいは毎月、一定の日時で観察する時間見本法と観察すべき行動の種類をあらかじめ規定しておく行動見本法(チェックリスト)がある。
質問紙法	あらかじめ調査する項目を印刷しておき、生徒に記入させる方法。「ハイ」「イエ」のどちらかに を付けさせるもの、文章や語句等で答えさせるものなどがある。簡単、具体的で記入しやすいように配慮する。
口頭試験	教師が口頭で質問し、生徒も口頭で答える。予め、発問内容を整理しておくとうよい。
実技試験	実地技術や運動技能などの水準を調べる方法。専門家の主観的評価によることが多い。数人の評価で妥当性を高める。
パフォーマンスアセスメント	「何を知っているか」ではなくパフォーマンス(作業や動作)により「何ができるか」を見るアセスメントをいう。
教師作成学力テスト	教師が自分で問題を作成して行う検査。全国的な基準に照らして優劣を知ることはできないが、教師が教えた内容について学習の結果を測定することができる。
標準学力テスト	一定の標本集団から一定の標準問題と標準方法と標準成績を作り、それによって個人を検査し、その成績を標準に照らし合わせて学力を診断する。個人の成績を他人と比較して区別する集団準拠検査と目標に達したかどうかを見る目標準拠検査がある。

辰野千尋：「学習評価ハンドブック」, 図書文化, 2002

表2 保健体育における観点別学習状況の評価と評価方法の適合関係

評価の方法としては、行動観察・発言・学習ノート・レポートなどがありますが、それぞれの特徴を考慮し、どんな方法で評価することが生徒の成長や教師の授業の振り返りに役立つかを理解する必要があります。

評価法	使い方	関意態	思判	技能	知理
観察 (行動・技能)	生徒の行動を観察し評価する方法。観察すべき行動の種類等をあらかじめ設定しておく。				
発問・発言	生徒の発言内容を評価する方法。予め、発問内容を整理しておく。				
記述分析 (学習ノート等)	記述内容を分析し、評価する方法。記述させる内容を学習内容に合わせて明確化しておく。				
ペーパーテスト	問題を作成し、教師が教えた内容について書かせ、学習の成果を評価する方法。				

...最も適すると考えられる方法

...やや適すると考えられる方法

...あまり適さないと考えられる方法

Q 評価の際、注意する点は何ですか？

「目標に準拠した評価を重視する」これからの評価活動においては、客観性を確保していくことが重要です。評価者によって大きな差が生じたり、どの事実を持ってそういえるのかが明確でなかったりすると、生徒にも保護者にも納得を得られないことになりかねません。場合によっては説明を求められることも考えられます。

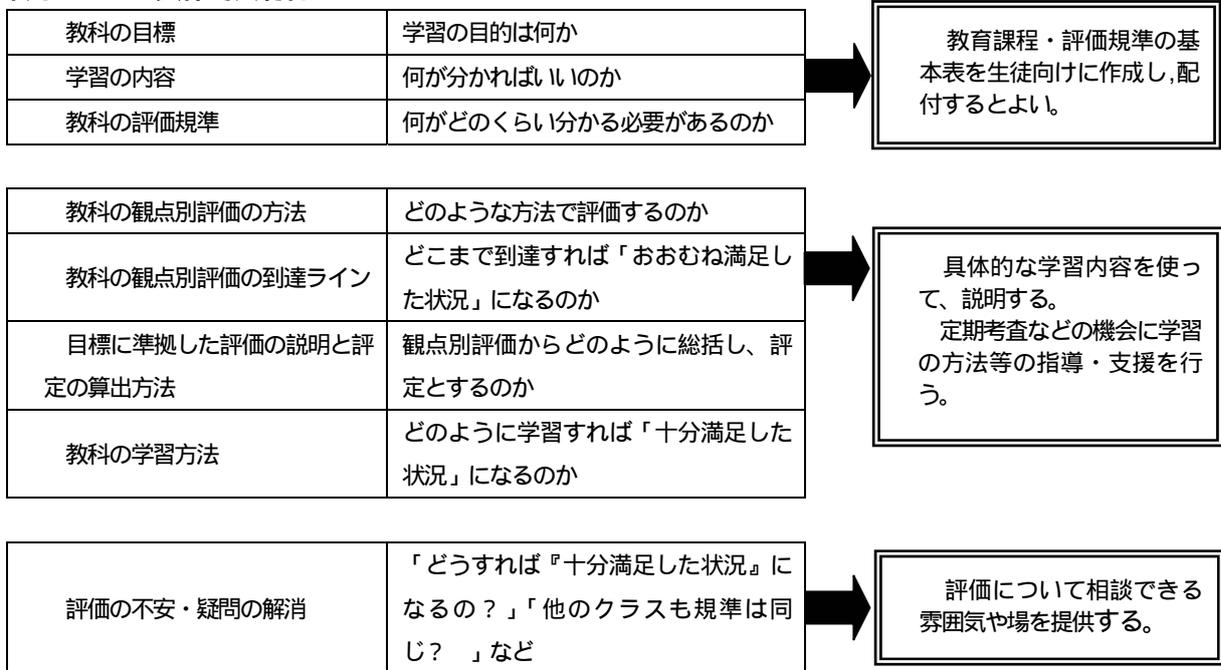
評価規準を設け、評価の観点によって方法を工夫して、評価を行うことが必要です。

同じように見えることでも、学習のねらいや評価の観点によって異なった評価になることもあります。学習目標に照らして、実現していると認められる具体的な状況を教師間で共通理解をして、授業に臨むことが大切です。

また、教科・学年・単元・1単位時間等のねらいと評価規準を予め、生徒や保護者に提示し、学習や評価に関して、共通理解を得ることも重要です。

図4 生徒と教師の評価の共有化(説明責任)

単元レベルの具体的共有化



(参考：横浜市中学校長会編：「評価・評定のマニュアル」2002)



チェック!

評価者が規準に照らして解釈し判断する評価は、なるべく主観を排する努力をしますが、客観的な評価を心掛けていても陥りやすい傾向があると従来より指摘されています。

例えば、何か目立つ良い(悪い)特徴を持っている生徒を実態よりも良く(悪く)判断してしまうといった「ハロー効果」や感じの良い好意の持てる生徒の判断が甘くなったり、あまり好きではない生徒の判断が厳しくなりがちといった、教師が生徒に抱く感情によって判断が左右されてしまう「寛容効果」などです。⁶⁾

これらを払拭するために、時には複数の教師で評価のすり合わせをし、客観性を高めることが必要です。

Q 評価を組み入れた年間授業計画(シラバス)の作成方法は？

シラバスとは各学校の教育活動に関する詳細な計画書のことです。

シラバスには、教科、科目をはじめとするさまざまな教育活動について、目標と内容、使用教材、指導計画、指導方法、評価方法等が記載されます。

シラバスは、生徒にとって履修科目を選択する際の重要な資料となり、生徒を主体的な学びに導きます。

シラバスに評価規準を記載することにより、教員も生徒も教科・科目等で扱う学習内容について、評価の視点となる評価規準をしっかりと意識することができます。そのことにより目標に向けた学習が実現しやすくなり、生徒がより意欲を持って学習に取り組むこととなります。

シラバスは詳細な授業計画として生徒が利用するだけでなく、教員相互の授業内容の調整、さらには家庭や地域への情報提示方法の一つとして、開かれた学校づくりに活用できます。⁷⁾

シラバス作成のポイント

内容の工夫	生徒・保護者及び教員が学習計画や展開等の見通しを持ちやすくする
視覚面の工夫	絵や図表を用いて、読みやすく、視覚的に捉えやすくする
学習目標を明らかにする	生徒のモチベーションが高まり、持続できるようにする
計画変更の際の対応を示す	実施過程での変更もあることに触れ、変更への対応の仕方が分かるようにする
評価・改善の資料とする	授業の評価・改善の重要な資料として、学校教育の新たな方向性を示すことができるようにする

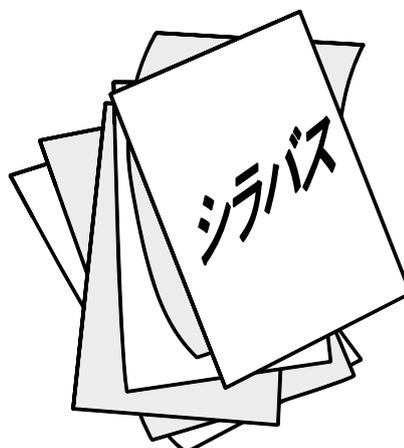
シラバスに記載すべき内容

シラバスは幅広い役割を持ちますが「保健体育科」としては次のような内容が求められます。

保健体育科の構成等の全体像	学年や系・系列に応じた設置科目の一覧、科目の設置学年と単位数等の記載
保健体育科の学習到達目標	学習の終了後に到達すべき学力等についての記載
保健体育科の指導計画	学習のねらい、学習内容、学習形態、進度等に関する記載
保健体育科の評価の観点・方法	評価の観点や評価規準等の具体的な内容についての記載

シラバスに盛り込みたい内容

学校教育目標
教科の目標
年間計画、配列(学習内容・時数)
学習のねらい
評価の観点・方法
体育的行事の計画
使用教材 等

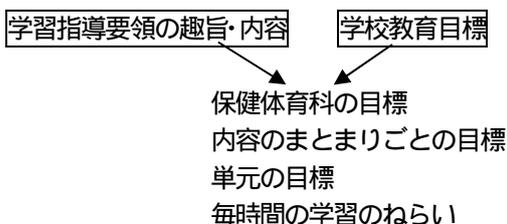


Q 評価規準はどのように作成すればよいのですか？

保健体育科の評価規準を作成するにあたり、次の点に配慮しましょう。

第1段階 = 目標の設定

評価規準の設定は、学習指導要領のねらい、学校教育目標から順次、具体的な単元の目標、毎時間の目標へと、次の手順で設定していきます。



チェック！

目標は、実際の授業に近づくにつれ、より具体的になります。常に、学習指導要領のねらい・趣旨を踏まえているか、学校教育目標等の趣旨を反映しているかをチェックしましょう。

第2段階 = 評価規準の作成

各目標の内容を分析し、学年ごとにどのようなことを生徒が実現(達成)したり、身に付けたりすべきかを「4つの観点」(保健は3観点)に分けて、次の手順で評価規準を作成していきます。

保健体育科の評価規準の設定
内容のまとめりごとの評価規準の設定
単元の評価規準の設定
学習活動における具体的評価規準



チェック！

これが基本的な評価規準となります。この評価規準で見取った資料等を集積し、評定につなげます。

目標の実現状況がどの程度で、「十分満足できると判断される」状況(A)、「おおむね満足できると判断される」状況(B)、「努力を要すると判断される」状況(C) (A)の中でも特に程度の高いもの(A) (C)の中でも特に程度の低いもの(C)とするのかを明らかにしておく必要があります。(5段階の場合)

評価規準の具体例では、できるだけ行動目標的な表現、子どもの学習活動がイメージできる表現となるようにします。

規準の示し方としては、数量的な達成、到達の度合いを指す「基準」ではなく、学習指導要領の目標に照らした実現状況、即ち新しい学力観に立って子ども達が自ら獲得し身に付けた資質や能力の質的な実現状況を指す「規準」を用います。

参考：評価規準の作成について(元文部科学省体育官 戸田芳雄)

第3段階 = 「おおむね満足できる」と判断される状況(B)の確認

第2段階で作成した評価規準が保健体育科の「基礎・基本」(全ての生徒が身に付けるべき内容)であることを確認し、「おおむね満足できる」と判断される状況を確認します。

第4段階 = 評価規準の工夫・改善

観点ごとの総合的な評価は、毎日の学習評価の積み重ねから得ることができます。作成した評価規準が妥当であったかどうかを見極めながら、各規準を細分化したり、項目を整理したりして、生徒の実態に即した内容になるよう工夫・改善を繰り返す必要があります。

(参考；日野 宏「学習評価をどう工夫するか」2003.8)

具体の評価規準作成上の基本的な原則



タテ（縦）の整理（教科・領域 単元 具体例の一貫性を図ります）

- 内容のまとめりごとの評価規準で使用した用語は避け、より具体的に表現します。
 (例 公正な態度をとろうとする 勝敗や結果を受け止めようとする[関心・意欲・態度])
- 文末は、観点で特徴的な姿や学習行動を表現する動詞（キーワード）とします。
 (例 課題を見付けている[思考・判断]、言ったり書き出したりしている[知識・理解]等)
 上記2項目で、縦を配慮して作成します。

ヨコ（横）の整理（観点間の表現の重複や紛らわしい表現を避ける）

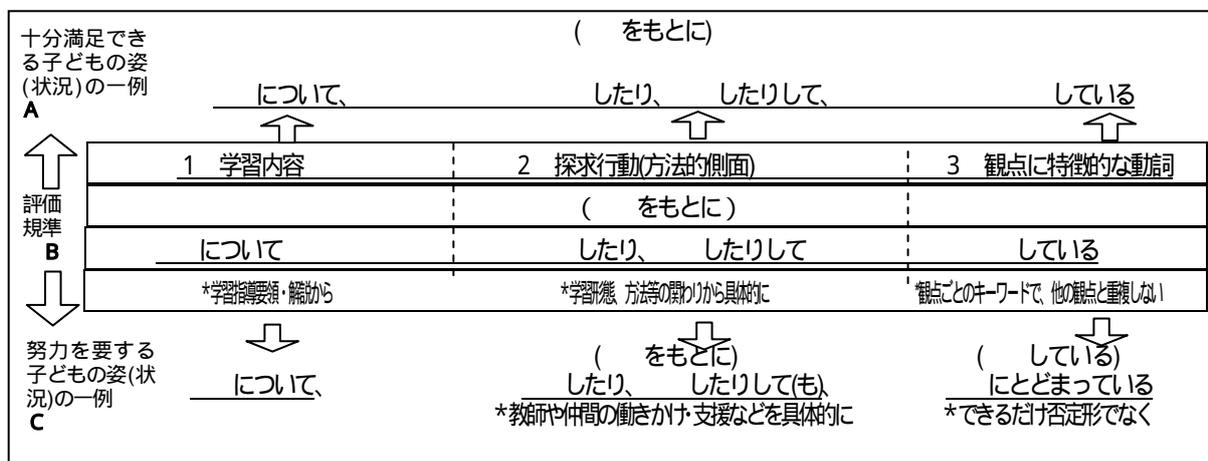
- 混乱を避けるため、観点間で同じ表現や似た表現を使用しません。
 (例 課題を見付けようとする[関心・意欲・態度]と課題を見付けている[思考・判断]...前者では使用しません)

高さの整理（同じ軸で質の高まりを表現する）

- 多面的に評価するため、「おおむね満足できると判断される」状況（B）を複数の視点から設定し、それぞれに「十分満足できる」及び「努力を要する」状況と判断できる学習活動（方法的側面）の例を学習形態・内容等との関わりで予測し、明らかにしておきます。
 (例 「技能」パス、レシーブの動作ができる（B） タイミングよく、パス、レシーブの動作ができる（A）、タイミングが悪く、パス、レシーブの動作ができないときがある（C）)

具体の評価規準にみる3文節の構造と、質的な高まりに伴う表現の変化

基本的には、学習内容、探求行動（方法的側面） 観点到特徴的な動詞の3つの部分に分けて表現します。（体育の場合、多くは「2 探求行動（方法的側面）」と「3 観点到特徴的な動詞」で表現されています）こうしたことを参考にして、各学校で作成する評価規準については、学習内容、学習形態・方法、生徒の実態等に応じて工夫してください。



参考；学習活動における具体の評価規準の構造、2004年9月（文部科学省 戸田芳雄）



チェック！

客観性を高めるための手立て

- あらかじめ本時の評価の観点を絞り込み、その観点について数名の評価者で着目生徒（「十分満足できると判断される」状況（A）、「おおむね満足できると判断される」状況（B））を評価します。
- 授業終了後、評価結果を持ち寄り、評価のすり合わせを行います。
- 結果を分析し、評価規準の規準性に問題があるのか、評価者の評価する観点（評価する目）がずれているのかを判断し、整合性を図ります。

🗨️ 指導と評価の一体化とはどういう意味ですか？

学校の教育活動は、**計画 実践 評価 改善**という一連の活動を繰り返しながら、生徒のよりよい成長を目指した指導が展開されなければなりません。

すなわち、指導と評価は別物ではなく、**評価の結果によって後の指導を改善し、さらに新しい指導の成果を再度評価する**という、指導に生かす評価を充実させること（いわゆる指導と評価の一体化）が重要です。

評価は、学習の結果に対して行うだけでなく、学習指導の過程における評価の工夫を一層進めることが大切です。また、生徒にとって評価は、自らの学習状況に気付き、自分を見つめ直すきっかけとなり、その後の学習や発達を促すという意義があります。

自ら学び自ら考える力などの「生きる力」は、日々の教育活動の積み重ねによって生徒に育まれていくものです。そのためには、日常の指導の中で、評価が生徒の学習の改善に生かされることが重要です。

また、目標に準拠した評価においては、生徒の学習の到達度を適切に評価し、その評価を指導に生かすことが重要です。そのため評価活動を、評価のための評価に終わらせることなく、指導の改善に生かすことによって、指導の質を高め、よりよい授業を実現することが重要です。



指導と評価の一体化の意味

教育活動は、**計画 実践 評価 改善**という一連の活動を繰り返しながら生徒のよりよい成長を目指して指導が展開されなければなりません。指導と評価は別ものではないという考え方です。

- ・ 学校教育目標
- ・ 教科目標
- ・ 学年目標
- ・ 単元目標
- ・ 毎時の目標

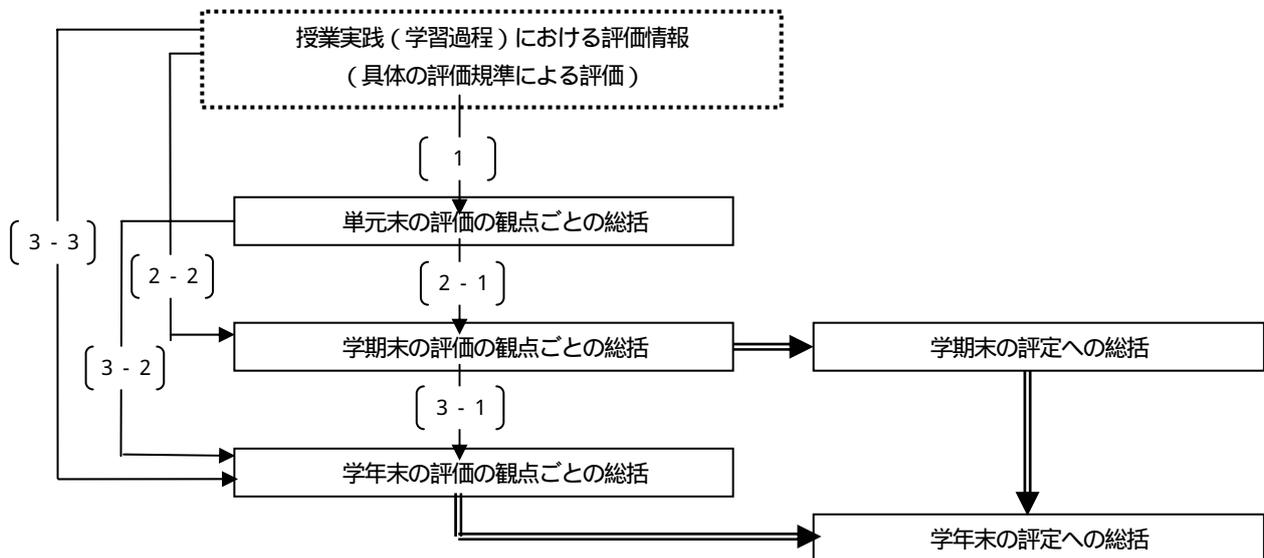
「生きる力」は日常の教育活動の積み重ねで育まれるもので、つねに評価が学習の改善に生かされなければなりません。

「基礎・基本の確実な定着」には、生徒の学習到達状況を適切に評価し、その結果が次の指導に生かされなければなりません。

新潟県立教育センター：「これからの学習評価」平成14年5月

Q 評価から評定へつなげるにはどうすればよいのですか？

観点別学習状況の評価の観点ごとの総括は、単元末、学期末、学年末に行うことが考えられます。評定への総括は、学期末や学年末などに行うことが考えられます。具体的な総括の流れとしては、次のように、いくつか考えられます。



（参考：「学習評価の工夫改善に関する調査研究」国立教育政策研究所 平成16年3月）

総括時期ごとの総括方法について

単元末における観点ごとの評価の総括

〔1〕 学習活動における具体的評価規準で見取った評価を、観点ごとに総括します。

学期末における観点ごとの評価の総括

学期末における総括の方法は次のような方法が考えられます。

〔2-1〕 単元ごとに総括した観点ごとの評価を、さらに学期末で総括する方法

〔2-2〕 学習活動における具体的評価規準で見取った評価を単元でまとめず、そのまま学期末の総括に結びつける方法

学年末における観点ごとの評価の総括

学年末における総括の方法は次のような方法が考えられます。

〔3-1〕 学期末に総括した観点ごとの評価を、さらに学年末で総括する方法

〔3-2〕 単元ごとに総括した観点ごとの評価を学期末でまとめず、そのまま学年末の総括に結びつける方法

〔3-3〕 学習活動における具体的評価規準で見取った評価を、単元や、学期末でまとめず、そのまま総括に結びつける方法

ポイント！

総括では、数値化（合算・平均化）する方法や組合せによる方法でまとめていくことになりますが、誤差を減らすためには、単元・学期末では「仮評価・仮評定」とし、学年末の最後にまとめると精度は高まります。

総括された結果は、生徒や保護者に知らせることはもちろん、次年度の指導の重点や、指導計画の改善に役立てることが大切です。

それぞれの総括の方法のメリット・デメリットを考え、各学校で工夫しましょう。



総括の具体的な方法には、次の二つを考えることができます。

- 1 評価結果をA、B、Cなどで表し、その**組合せ**などで判断する考え方
- 2 A = 3点、B = 2点、C = 1点などのように記号で表した評価結果を**数値化**し、これを合計したり、平均したりするなどして判断する考え方

1 組合せによる方法(A、B、Cとした場合の例)

A、B、Cなどの、組合せでの総括結果をあらかじめ設定しておきます。例えば「A B B B」ならばBと総括します。なお、「A A B B」の総括結果をAとするかBとするかなど、同数の場合や三つの記号が混在する場合の総括の仕方をあらかじめ決めておく必要があります。

2 数値化による方法(A = 3点、B = 2点、C = 1点とした場合の例)

上記の点数の平均値に対応した判断の基準をあらかじめ設定しておきます。例えば、〔総括の結果をBとする判断の基準を1.5 平均値 2.5〕とすると、「A B B」の平均値は、 $2.3 [= (3 + 2 + 2) \div 3]$ で総括結果はBとなります。

評定の5は「十分満足できると判断されるもののうち、特に程度の高いもの」であり、観点別学習状況の評価(A)は、その実現状況に幅があると言えます。よって当ハンドブックでは(A)と(C)を2段階に細分化した5段階で例示しています。

A B Cよりも、A A B C Cの方が、5段階評定へより正確につながられるというメリットがあります。



A 十分満足できると判断される状況のうち、特に程度の高いもの

A 十分満足できると判断される状況

B おおむね満足できると判断される状況

C 努力を要すると判断される状況

C 一層努力を要すると判断される状況

各観点の重み付けについて

重み付けについては、各単元の時間数により重みを付ける方法と、各観点に重み付ける方法が考えられます。後者の方は、観点別評価の趣旨を踏まえ、4つの観点の評価をバランスよく評定につなげることが基本ですので、重み付けをする場合は、極端な重み付けは避け、その理由を生徒・保護者に十分説明できるようにしておく必要があります。

引用参考文献

- 1) 宇土正彦他編著：「体育科教育法講義」大修館書店 1992.10
- 2) 日野 宏：「保健体育ジャーナル」68号 学習研究社、2004.1
- 3) 川崎市教育センター：「新学習指導要領とこれからの評価」 評価を授業に生かすためにー平成13年11月
- 4) 佐野金吾・児島宏編著：「新しい評価の実際」-生きる力を育てる評価(第2巻)- ぎょうせい、2001.7
- 5) 新潟県教育センター：「これからの学習評価」平成14年5月
- 6) 佐野金吾・児島宏編著：「新しい評価の実際」-生きる力を育てる評価(第1巻)- ぎょうせい、2001.7
- 7) 神奈川県立総合教育センター：「高等学校シラバス例示集」平成16年2月
- 8) 財)日本学校保健会：「意志決定・行動選択の力を育てる高等学校保健学習プラン」
- 9) 文部省：「体づくり運動」 授業の考え方と進め方 東洋館出版社、平成12年3月
- 10) 佐々木 圭：「平成14年度 神奈川県立体育センター学校体育長期研修研究報告書」 神奈川県立体育センター、平成15年3月